動機の語彙論と「ほんとうの動機」論――C.W.ミルズにおける動機論の動機論を中心に――

伊奈正人 [1]

報告主旨

最初期の知識社会学から晩年の社会批判、社会学批判に至るまで、ミルズには一貫した知識社会学的な視点がある。視点読解の鍵となるのは、ミルズの批評活動のモチーフとなった“politics of truth”[2]という考え方である。テキサス大学の一次史料を精査した有力なミルズ研究は主として政治史、政治思想史の研究として公刊されてきた。そのいずれもが“politics of truth”に着目し、思想的コンテクストを解明した。[3]　この一見陳腐なスローガンにミルズ社会学の核となる思想が胚胎されている、というのが諸研究に共通する論点である。本報告は、このスローガンを知識社会学的視点と対比し、一つの再帰的視点を再構成しようとするものである。そのため、ケネス・バークの批評理論（＝批評の批評）に照らして、動機の語彙論（とりわけ、問題視されてきた「ほんとうの動機」論）を読解する。再構成されるのは、学問、芸術、ポピュラー文化から、日常的な生までの作品モチーフをシームレスに省察する批評的な視点（＝動機論の動機論）である。こうした読解により、モーティブ・トーク論とはまた異なる方向性（作品モチーフの文化社会学）で動機の語彙論を解釈することができる。

報告原稿

1. 目的と方法

1.1. 目的

この報告の第一の目的は、ミルズにおける初期の知識社会学説から晩年の社会批判までを貫く自省的視点の抽出を行うことで、ミルズの学説研究に貢献することである。視点は動機論の動機論という文言で括られる。ミルズの作品群における批評的モチーフを担っているものである。作業は、初期論考における動機の語彙論、就中しばしば批判される「ほんとうの動機」論の再解釈を通して可能となる。動機の語彙論は、モーティブトーク論により再発見され、高く評価されたことは周知の通りである。そのなかで、ガースとの共著書と初期論考との関係などテキスト的な問題が指摘された。しかし未解

---

[1] 東京女子大学現代教養学部国際社会学科社会学専攻　email: inainaba@lab.twcu.ac.jp

[2] ミルズは1943年に書いた書簡(Mills to Gerth Decem.7、Mills to Saul Alinsky Decem 18) に、ドワイト・マクドナルドらとの交友を嬉々として語り、そして“politics of truth”という論考を書くことを吹聴している(Mills2000 p.56 p.60 p.62)。同名の論考は見あたらないが、『ポリティックス』誌に書かれた知識人論がそれにあたるとの解釈が有力である。

[3] “politics of truth”をめぐる文献レビューが不足していたので、補足として注記しておく。

50年代以降にミルズが行った社会批判、社会学批判と40年前後の知識社会学との間にギャップを見る見解に対し、報告者は一貫する知識社会学的な視点があったことを主張してきた（伊奈1991他）。同様の見解に立つ先行研究としてはGillam1966がある。

ミルズの書簡や草稿類を整理し、テキサス大学のコレクション蒐集に貢献したGillamは、先駆的な史料研究を行った。そして、初期の知識社会学的論考が40年代前半からの社会批評モチーフとなり、そこから50年代以降の大衆社会批評が生まれた[3]　ことを示した。Gillam1975は、“politics of truth”という着想が『パワー・エリート』読解の鍵となることを論証した。

Geary2009は、“politics of truth”論が「真実＝ラディカル、ラディカル＝真実」という循環論法を用いていることなど、理論的な識見を欠いた不備のある表現であることを確認する。その上で、書簡における語用、「無力な人々」「知識と権力」などの批評的な論考を検討し、“politics of truth”論の再帰性を吟味し、ミルズの知見を再構成する。そして、『パワー・エリート』、『社会学的想像力』の解釈を行った。最後は、「未刊の次著」『文化装置』にまで論じ至っている。

Summersは、“politics of truth”を鍵語として、最初期から晩年に至るミルズの未発表論文集を編纂した（Summers ed.2008）。詩人JamesAgeeを論じたミルズの“sociological poetry”に着目し、ミルズの著作の作品性を読み解く試みをしている。

決の問題も多い。あくまで暫定的なものになるが、こうしたテキスト問題を論定することは、動機論の動機論の論定に随伴する不可欠の第二の検討目的となる。

1.2. 方法

テキストについては、テキサス大学の一次史料を用いた米英のミルズ研究をレビューすることで論定する。一冊を割いて共著問題を論じた Oakes&Vidich1999、同著をさらに史料批判した Geary2009 などを参照しながら検討を行う。他方、動機付与論によるテキスト読み込みについても言及を行う。第一の目的については、ミルズ自身が着想の典拠としてリファーしているケネス・バークの批評論との関係に焦点をおいたテキスト読解[4]を方法として検討を行う。

2. 結果と結論

2.1. ミルズのテキスト問題

『性格と社会構造』はウェーバーの社会学的、社会心理学的体系化を行った教科書として 40 年代に構想され、1954 年に刊行された。ミルズは、ガースの講義ノートを書き起こすことで同書の共著者となったが、両者の出会いは 1940 年秋であり(Geary p.229 NB.79)、ミルズの初期２論考はそれ以前に書かれている。よって動機の語彙論は、ミルズの貢献である。初期論考と共著書では、筆致はともかく、動機の語彙論をめぐる論点としてはあまり差がない。[5]　動機付与論の論考でもブラム＝マクヒューなどはより類型的な共著書のみを引用している。[6]

2.2.「ほんとうの動機」論から“politics of truth”論へ――動機論の動機論を軸に

2.2.1. 初期論考の検討１：ことばの力動と「真実化」の原基的構造

ミルズの初期論考のうち最初の一本「言語･論理･文化」は、テキサス時代に ASR に受理されたものである。[7]　同論文にもすでにバークの影響はうかがえる。ミルズは、語彙の体系に照準し、言語＝行為という観点から思考の座標軸をモデル化している。[8]ミルズのモデルは、思考を根拠づける潜在的次元＝規範構造としての文化に着目するところに特徴がある。論文のタイトルが「言語、論理、文化」となっている理由もここにある。

---

[4] すでにケネス・バークの批評論のミルズへの影響については、伊奈2006で論じている。ただし、この論文は、「不調和によるパースペクティブ」（perspectives by incongruity）論とミルズの社会学的想像力の関連に特化したものである。同論文では、晩年の社会学的想像力論に対するバークの影響についても論じている。

[5] 西川1991、井上1997などは、共著に至ると、動機の語彙の「内面化」を重視する方向へと陳腐化している、とも考えられると指摘している。前田2008は、こうした議論に加え、他方でブラム&マクヒューのガース＝ミルズ批判を踏まえて、動機の帰属に偏った立論を批判する。その狙いは、観察者の原理とも、行為者の原理とも混同することなく、動機概念の分析的特徴を際立たせ、実践における動機帰属という分析の地平を提示することであると思われる（p.226f.）。本報告は、この意味あいでの動機理論の彫琢を目指すものではないが、こうした立論には、分析的方向性として、学んでおきたい。

[6] テキスト問題は、第一に初期論考と『性格と社会構造』のギャップという問題、第二に『性格と社会構造』の共著関係と動機の語彙論におけるミルズの貢献という二つの問題に整理される。報告原稿には、ミルズに一貫した独自の貢献としての再帰的視点＝動機の語彙論という結論のみを表記した。詳細なテキスト批判に関しては、伊奈2010a を参照。Oakes & Vidich1999、Geary2009などがこの問題に関して、一次史料を用いたテキスト批判を試みている。前者は、ガースを著作でも講義でも自分の知を作品化することが上手くできずに終わった社会学者として描いた。他方、ミルズについては、ガースの思想を希釈し、縦横無尽に駆使して自らの作品を生み出した社会学者として描き、ガースの思想をポピュラー化した社会学者という以上の評価を与えていない。しかし、後者は、それはいささか一面的な評価である、と批判している。（Geary2009　p.49）

[7] ゲーリーは、「言語、論理、文化」の原稿がテキサス大学の学生であった時に受理されたと述べている（Geary2009 p.23）。他方で、ウィスコンシン大学での指導教員H・ベッカーが公刊にこぎ着けるのに一定の役割を果たした、と言っている(Geary2009, p.26)。後者は特に前者の事実を直ちに覆すものではないので、前者の判断を優先しておく。

[8]　ミルズの文章を引用しておく。「集団に共通するシンボルを利用することで、はじめて思考者は考え、伝達することができる。社会的に作り上げられ、維持されている言語が暗黙の制裁と社会的評価を体現する。言語カテゴリーを習得することによって、われわれは集団の構造化された「風習」を習得し、言語といっしょに、それらの「風習」の価値内容を習得する。われわれの行動と知覚、論理と思想は言語体系の統制下に入る。言語に従って、われわれは一群の社会規範と価値を習得するのである。語彙とはたんなる単語の連鎖（string）ではない。そのなかには社会的織地（textures）――制度的、政治的座標――が内在している。語彙の背後に一連の集合的行為が存するのである。」（Mills1939→1963 p. 433＝佐野勝隆訳1971 p.341）。

ミルズは、リチャーズを参照しつつ、思考の語彙は社会的な目的のためにいくつかの要素を「隠す」機能を持っている、という仮説を提示している。そして、「隠す」こと＝曖昧化／顕在化＝区別ということばの力動から、社会、思考、文化の形成と変動を説明する。例としてミルズは、中国の伝統的な社会をあげる。年齢とそれに対する尊敬が密接不可分のものとして「曖昧語」で表現され、社会の基本的な価値づけを絶対化する傾向がある。逆に、高齢者への尊敬が薄れてくれば、加齢と尊敬の語彙は分析的に区別されるようになる。そうミルズは言っている。

また、ミルズは例として、ビジネス文化――ヴェブレンの言うビジネスの論理、セールスマンシップ、――の形成のなかで、曖昧語である「資本」が用いられるようになったこともあげている。すなわち、マネーゲームが自己目的化し、絶対化してゆくにしたがい、「資本」という語彙が汎用されるようになった。そうミルズは指摘している。 ミルズの提起した語彙分析のモデルは、このように潜在するものを読みほどきながら、思考者の「論拠」（rationale）を考察する。このモデルにすでに思考のモチーフ、モチーフの原基的構造への問いが胚胎されている。

こうした立論の決定的なきっかけとなっているのは、バークの次のような文章である。「物とうごきの名称は善し悪しの言外の意味をこっそり持ち込んでいる。名詞は一種の見えざる形容詞を伴いがちであり、動詞は見えざる副詞を伴いがちである」。ことばの力動の原基的構造を問うバークの批評理論は、ミルズの出発点から影響を与えていたということができる。

2.2.2. 初期論考の検討２：「ほんとうの動機」論と真実の意匠批評

動機の語彙概念がはじめて提示されたのは論文「状況化された行為と動機の語彙」である。動機外在説、動機付与論と通称されるミルズの着想は、K.バークの『恒久と変化』によるものである。バークは、意味を囲い込む「状況の速記用語（shorthand term）」として動機をとらえる。ミルズは、バークの動機論を集約する一文を引用している。「動機を反省するわれわれのことばは、あい矛盾し衝突する刺激の典型的なパターンのおおまかにして、速記的な描写である」。ミルズは、日常生活の動機の語彙と、哲学、心理学、精神分析学、社会学などの学問用語とを、シームレスに、動機の語彙論で説明しようとする。[9]そして、マンハイムの相関主義に照らし、生活や学問におけるさまざまな動機づけの論理（理由・原因・根拠づけの意匠、ルール化）を、状況、集団、制度、時代などの違いにより、動機の語彙論でタイプ分けすること、いわば「動機論の動機論」の構想を示している。動機付与論が問題にする「ほんとうの動機」論もこのような自省的視点に立つなら、真実の意匠論として再解釈できる。[10]

この構想にもバークの影響がうかがえる。『恒久と変化』は、「あらゆる生の作品性」という観点から批評概念を社会学的に拡張した著作である。批評の方法は、「訓練された無能力」のように、あ

---

[9] ミルズは次のように言っている。「言語的かつ社会的な事実の領域を説明できる見通しを与えるだけでなく、この動機論のいっそうの利点は、それによって、われわれが、動機づけに関する他の理論（ターミノロジー）を社会学的に説明できるという点にある。これは知識社会学の課題である。」（Mills1940b→Mills1963 p.450＝田中義久訳1971 p.354）。

[10] タイプ分けのターミノロジーの一例として、ミルズはフロイト主義の「ほんとうの動機」、深層の動機などについて、検討を加えている。「ほんとうの動機」は一方で、動機付与論のアイロニカルな切れ味の例解としてよく用いられる議論である。犯罪、自殺などの問題が起こったときに「ほんとうの動機はなにか？」と問われる。しかし、本人も含め、誰も「ほんとうの動機」はわからない。状況が整理、説明され、伝達、納得されたとき、それが「ほんとうの動機」となる。動機の語彙とは、状況の意味を象徴し伝達する戦略的なことばのセットである、と。

しかし他方で、ミルズは、「ほんとうの動機」論において、フロイト主義的な深層心理学の知見を批判的に検討している。「ほんとうのこと」や深層への問いかけは、「隠された次元」、潜在的な価値規範への問いかけでもあることには、十分な注意がはらわれるべきである。このケネス・バークの視点に基づき、一定の根拠づけを絶対化する議論に知識社会学的な批判を加え、再帰的な立論を行うところに、ミルズ知識社会学の最大の特徴がある。＝「隠し方の意匠」論

ミルズはフロイト主義的な動機の語彙が、「強い性的志向をもつ上層ブルジョワの指導的な集団の動機論」であると言っている。（Mills1940b→Mills1963 p.450＝田中義久訳1971 p.354）この他ミルズは、マルクス主義の動機論、経営者側の動機論、現代社会の快楽主義的な動機論などに言及している。

る単語（「訓練」）を、不敬だが啓示的な文脈（「無能力」）へと変換し、隠喩化すること＝同書の鍵概念「不調和によるパースペクティブ」である。隠喩は、「作品としての生」の動機＝モチーフを批評する際に用いられる「喜劇化」の方法である。あらゆる隠喩の洞察はそのなかに固有の盲点を含む。一定の変換は、一定の可能性から隔離する。バークは、動機を単一の隠喩に変換・還元するのではなく、隠喩を重ね、原基的な構造を問う「批評の批評」を提起した。バークの批評方法は、ミルズの方法論と重なる。

2.2.3. 大衆社会批判と“politics of truth”論

ミルズは、いわばさまざまな生活世界、作品世界、システム世界が志向する「ほんとうへの動機（モチーフ）」を批評する知識社会学を構想していた。「動機論の動機論」は、共著『性格と社会構造』の不十分な教科書的整理をのぞけば、体系化されていない。ミルズの批評的な努力はむしろアメリカの社会や社会学の「人間喜劇」を描くことに注がれた。そして、動機論の動機論という着想は後期[11]の“politics of truth” 論へとつながり、ホワイトカラーやパワーエリートに対する批評となって結実した。

ミルズが描く大衆は、真実としてのアメリカの豊かさと民主主義を信奉し、規則を守り、よく働き、消費生活を享受し、楽しげで、力強く能動的な人間である。しかし、歴史の行く末の制御ということに関しては自律性を失っている。ミルズは「陽気なロボット」という表現でこのような大衆を捉えた。権力一元論は、多元的な社会に対する間違った素朴な認識として批判された。[12]他方で、社会変革の可能性を封殺するペシミズムだとも批判された。しかし、ミルズの意図は、極論を対置することで、アメリカの多様性と民主主義を盲信する「真実への政治」を批評することだった。ミルズの立論は、極端な対極の提示＝多様化のための一元論の批評的提起により、公論を喚起することにあった。本報告の動機論の動機論という解釈は、ミルズにおけるファシズムというメタファーの意味を解明する。

2.3. 作品モチーフの文化社会学へ

動機論の動機論という解釈により、作品動機（モチーフ）の社会学的批評[13]という領野が開示される。それは、合理的な統治機構が巨大な可能性を生み出すものであると同時に深刻な危機を胎んでいる現代社会において、作品としての生、そして作品としての文化、作品としての科学等の「表情」（長谷正人）を批評するという課題を提起している。

文献：

Aronowitz, A.ed. ,2004 , *C. Wright Mills, I-III*, Sage.

Berger,P. & Luckmann,T.,1966,*The Social Construction of Reality: A Treatise on the Sociology of Knowledge*, Anchor Books.

Blum, A .F. & McHugh P., 1971, “The Social Ascription of Motive,” *American Sociological Review,* 36 (1)：98-109.

---

[11] 「後期の」という表現は間違えである。

[12] 科学技術の発展、工業化に伴う社会変動は、社会枠組のラディカルな刷新を世紀転換期の社会科学者に突きつけた。ヨーロッパ的な知は新しい科学技術に人間の退嬰をみたが、プラグマティズムはそこに可能性を見た。そしてアメリカの社会科学は、ラディカルに刷新された枠組を模索した。そのラディカルな知は、やがて自国の多様性を礼賛する知へと変容する。ミルズも巨大な社会機構の可能性を肯定的に捉えていた。ミルズが問題にしていたのは、巨大な社会機構が権力エリートにも御しきれなくなっているということである。ミルズが支配階級という言葉を使わないゆえんである（このような権力論解釈は高橋肇の諸論考の貢献である）。そして、社会科学は御すためのラディカルな反省を行わなくなってしまった。故に、ミルズは大衆社会論を提起し、社会学批判を行った。Melossi1990は、こうしたミルズの権力論を、フーコー他の権力論と対比する。そこで要として用いている概念が、動機の語彙であることにも注意したい。

[13] 印象批評を払拭した社会批評の確立、その根幹にある作品性批評、公共性の変換に資する再帰的でポイエティックな知の確立という点をクローズアップするためにこのような文言を用いた。物語論という文言を用いない理由は、二つある。第一に物語論というとき特定の作品化が固定されるように思われたことである。第二に、報告者がサブカルチャーや若者文化の作品性という問題と対峙していることである。そうした解析には、作品モチーフというほうが議論として簡便である。ただした方で、モーティブトーク分析、ライフストーリー分析という手法的には曖昧で、作品性がマジックワード化していると言えるかもしれない。

Burke,K., 1935, *Permanence and Change*, New Republic→1954,University of California Press.
———, 1937, *Attitudes Toward History,* University of California Press.
———, 1941a, *The Philosophy of Literary Form,* Louisiana State Univ. Press → 1973, University of California Press.（＝1974, 森常治訳,『文学形式の哲学』国文社。）
———, 1941b, *A Grammer of Motives*, University of California Press.
（＝1982, 森常治訳,『動機の文法』、晶文社。）
———（Gusfield,J.R.ed.）, 1989, *On Symbols and Society,* University of California Press（＝1994 森常治訳,『シンボルと社会』法政大学出版局。）
藤原信行, 2008, 「『動機の語彙』論再考——動機付与をめぐるミクロポリティクスの記述・分析を可能にするために——」『Core Ethics』vol.4 立命館大学。
船津衛, 1976, 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。
Geary, D.,2009, *Radical Ambition: C.Wright Mills, the Left,and American Social Thought,* University of California Press.
Gerth, H .H. & C. W. Mills, 1953, *Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions,* Harcourt: Brace & World Inc.（＝1970, 古城利明・杉森創吉訳、『性格と社会構造—社会制度の心理学』青木書店。）
Gillam,R.,1966, *The Intellectual As Rebel:C. Wright Mills 1916-1946*, Unpublished M.A.essay Columbia University. → 2004 Aronowitz, A.ed.
————, 1975, "C.Wright Mills and Polics of Truth: *The Power Elite* Revised", American Quarterly
Hewitt, J. P. & Stokes,R., 1975, "Disclaimers," *American Sociological Review*, 40 (1)：1-11.
Horowits,I.L., 1983, *C.Wright Mills：An American Utopian*, Free Press.
伊奈正人, 1991, 『ミルズ大衆論の方法とスタイル』勁草書房。
————, 2006,「社会学的想像力再考」『地球情報社会と社会運動』ハーベスト社。
————,2010a,「動機の語彙論と知識社会学——動機付与論から「動機論の動機論」へ」『経済と社会』38 東京女子大学社会学会。
————,2010b 「動機の語彙」『社会学事典』丸善。
————,2010c 「社会学的想像力」『社会学事典』丸善
伊奈正人・中村好孝, 2007,『社会学的想像力のために——歴史的特殊性の観点から』世界思想社。
————————, 「エリートと支配」井上俊・伊藤公雄編『政治・権力・公共性（社会学ベーシックス9）』世界思想社 近刊予定
————————, 「武器としての想像力」井上俊・伊藤公雄編『社会学的思考（社会学ベーシックス 別巻』世界思想社 近刊予定
井上俊, 1997,「動機と物語」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学１ 現代社会の社会学』岩波書店。
———, 2008, 「動機のボキャブラリー」井上俊・伊藤公雄編『自己・他者・関係 （社会学ベーシックス1）』世界思想社。
Jones, R.P., 1977, *The Fixing of Social Belief: The Sociology of C. Wright Mills*, Ph.D. Dissertation of University of Missouri.
前田泰樹, 2008, 『心の文法』新曜社。
Mattson, K., 2002, *Intellectuals in Action*, The Pennsylvania University Press.
Melossi, D. ,1990, *The State of Social Control*, Polity.（=メロッシ 1992 竹谷俊一訳『社会的統制の国家』彩流社）
Mills, C. W., 1939, "Language Logic and Culture" *American Sociological Review,* vol.IV、no. 5 （October）670-680→1963 Horowitz,I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Weight Mills*, Oxford University Press, 423-438. （＝1971, 佐野勝隆訳「言語、論

理、文化」青井和夫・本間康平監訳『権力　・政治・民衆』みすず書房、334-344。）
————, 1940a, “Methodological Consequences of the Sociology of Knowledge” *American Journal of Sociology,* vol.XLVI no.3（November）316-330→1963 Horowitz,I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Weight Mills*, Oxford University Press, 453-468.（＝1971, 田中義久訳「知識社会学の方法論的帰結」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、356-368。）
————, 1940b, “Situated Actions and Vocabularies of Motive,” *American Sociological Review,* vol.V (December):904-913 → 1963 Horowitz, I.L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 439-452.（＝1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、344-55。）
————, 2000. *C. Wright Mills: Letters and Autobiographical Writings*, University of California Press.
西川珠代,1991,「社会学における『動機』概念の変容―ウェーバーの動機理解と『動機の語彙』論の動機付与」『ソシオロジ』36（1）:63-79.
中内敏夫,2005,『教育評論の奨め』国土社.
Oakes,G. & Vidich,A.J., 1999, *Collaboration, Reputation and Ethics in American Academic Life: Hans H.Gerth and C.Wright Mills*, University of Illinois Press.
Scott, M. B. & Lyman S.M., 1968, “Accounts,” *American Sociological Review*, 33（1）: 46-62.
Summers, J.H., 2007, “James Agee and C. Wright Mills:Sociological Poetry” Lofaro, M.A. ed. *Agee Agonistes: Essays on the Life, Legend, and Works fo James Agee*, University of Tennessee Press.
——————, 2008, *Every Fury on Earth*, The Davies Group Publishers.
Summers, J.H. ed., 2008, *Politics of Truth: Selected Writings of C. Wright Mills,* Oxford University Press.
田口富久治他,1994,『現代政治の理論と思想』青木書店
高橋　肇 ,1994,「プラグマティズム批判から思想の社会学へ」『名古屋大学法政論集』152
————,1997,「「政治化された経済」の時代の政治学――C.ライト・ミルズの制度論的エリート論」『経済科学通信』84。
———— ,1998,「C.W.ミルズ「権力エリート」モデルの問題視角――自由と責任ある民主主義は可能か？」『研究紀要』17，名古屋音楽大学。
———— ,2001,「ミルズ・ペーパーズとミルズ・ライブラリーについて」『研究紀要』20，名古屋音楽大学。